肺癌術後再発後長期生存例の検討

市立甲府病院　呼吸器外科　　宮澤正久
外科　　花村　徹　赤池英憲　三井文彦　千須和寿直　巾　芳昭
呼吸器内科　　佐藤亮太　山家理司　大木善之助　西川圭一　小澤克良

要旨：肺癌術後再発例の予後は不良であるが再発後長期生存する症例もみられる。肺癌術後再発後長期生存例の臨床病理学的特徴につき検討した。原発性肺癌切除例308例中74例（24.0%）に術後再発を認め、再発後の5年生存率は11.8%であった。74例中再発後2年以上生存した19例を長期生存群とし他の55例（短期生存群）と比較検討した。長期生存群には女性、腺癌の比率が高い傾向を認めた。手術時病理病期、再発臓器数、胸腔外臓器転移の有無に関し両群に差を認めなかった。無再発期間に関しては長期生存群で長い傾向を認め、長期生存群は短期生存群に比し再発後治療施行症例が有意に多かった。肺癌術後再発症例でも積極的な治療により生存の延長が期待できる可能性が示唆された。

キーワード：肺癌術後再発、長期生存

はじめに

原発性肺癌術後再発例の予後は不良と考えられるが、近年は種々の治療法により再発後に長期生存する症例も少なからず経験される。今回、肺癌術後再発後長期生存例につき、その臨床病理学的特徴について検討した。

対象と方法

1999年4月～2007年12月における原発性肺癌切除例308例中、再発をきたした74例（24.0%）を対象とした。再発後2年以上生存した19例を長期生存群、再発後2年以内に死亡あるいは2年未経過の55例を短期生存群とし2群を臨床的・病理学的に比較検討した。

結果

全症例308例の病期別再発率はIA:9.3%、IB：27.5%、IIA：33.3%、IIB：48.0%、IIIA：76.7%、IIIB・IV：50.0%であり、組織型別再発率は腺癌：22.5%、扁平上皮癌：24.1%であった。再発例74例の再発後平均生存期間は24.4ヵ月（1-68ヵ月）で、3年生存率27.0%、5年生存率11.8%であった（図1）。長期生存群と短期生存群の比較（表1）では、年齢に差はなく、長期生存群に女性、腺癌の割合が高い傾向がみられた。病理病期I期の占める割合は2群とも同等であり、無再発期間は長期生存群で有意差はみられなかったものの長い傾向を認めた。再発臓器数や胸腔外臓器転移の有無については両群同等であったが、再発後治療に関しては長期生存群で有意に多く行われていた。長期生存群19例の再発後平均生存期間は45.9ヵ月（24-68ヵ月）、3年生存率67.4%、5年生存率29.5%であった。

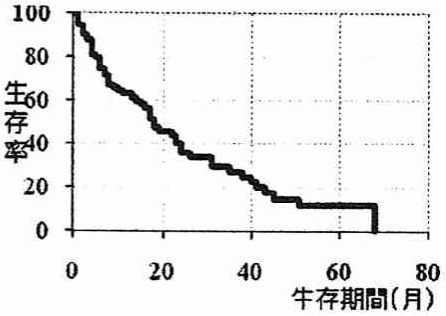

図1　再発例全体の再発後生存率

考察

原発性肺癌切除例において病理病期Ⅰ期であってもその再発率は20%近くあるとされ[1]、術後再発転移例は少なくなくその予後は不良と考えられる。しかし最近では再発後も長期にわたり生存する症例も日常臨床においてしばしば経験されるようになった。今回、再発後2年以上生存した症例を長期生存群として、それ以外の症例（短期生存群）と比較検討した。長期生存群には女性・腺癌が多い傾向にあった。組織型に関し扁平上皮癌は腺癌よりも術後早期に再発転移し予後不良とする報告[1]もみられ、性別に関しては扁平上皮癌が男性に多いこととも関連し女性に長期生存例が多い結果であったと推察された。手術時病理病期は両群同等で再発後の予後因子にはなっておらずⅠ期症例でも再発後の予後は決して良好とは限らないと考えられた。無病期間が長いほど再発後も良好な予後が期待されると考えられるが、今回の検討でも有意差はみられなかったものの、長期生存群では無病期間が長い傾向を認めた。両群間の最も大きな相違点として長期生存群では有意差をもって再発後治療施行症例が多かった。再発後の治療内容に関しては、個々の症例により様々な治療が施行されているのが現状であるが、2000年以降に現れた複数の新規抗癌剤や分子標的治療薬[2]、脳転移に対するγナイフ治療[3)-5)]等の効果が寄与しているところが大きいと考えられ、治療の有無が予後決定因子となっていることが示唆された。短期生存群においては、無病期間が短く再発時全身状態が不良でありbest supportive careにとどめざるを得ない症例も多く含まれていたが、肺癌術後再発例でも可能な限り積極的な治療を施行することで長期生存が期待できると考えられた。

結語

肺癌術後再発後長期生存例につき検討した。長期生存群には女性、腺癌が多い傾向があり、再発後治療の有無が予後に関与していると考えられた。

表1　長期生存群と短期生存群

		長期生存群 (n=19)	短期生存群 (n=55)	P value
年齢（歳）		67.0	69.6	NS
性別	男性	9	39	NS
	女性	10	16	
組織型	Adeno.	17	33	NS
	Sq.	2	18	
	Others		4	
病理病期	IA +IB	8	23	NS
	>II	11	32	
無再発期間（月）		21.7	17.2	NS
再発臓器数	単臓器	12	28	NS
	複数臓器	7	27	
胸腔外臓器転移	有	9	25	NS
	無	10	30	
再発後治療	有	18	35	p=0.02
	無	1	20	

引用文献

1）野中　誠、大野正裕、福隅正臣、他．原発性Ⅰ期肺癌術後再発転移例の検討．日本胸部臨床　2005;64:258-264.

2) Kim ES, Hirsh V, Mok T, et al. Gefinitib versus docetaxel in previously treated non-small-cell lung cancer (INTEREST): a randomized phase III trial. Lancet 2008;372:1809-1818.

3）一ノ瀬高志、渋谷丈太郎、渡邊龍秋、他．繰り返す多発性脳転移に対してガンマナイフ治療を行い術後長期生存中のpN2非小細胞肺癌の1例．肺癌　2009;49:202-206.

4）小山　徹、田中清明．転移性脳腫瘍に対するガンマナイフによる定位放射線治療―主要原発巣からの脳転移500例の検討．信州医学雑誌　2008;56:359-364.

5）掛屋　弘、井上祐一、澤井豊光、他．肺癌術後脳転移に対してGamma-knife stereotactic radiosurgeryを繰り返して長期生存が得られた1例．日本呼吸器学会雑誌　2005;43:736-740.